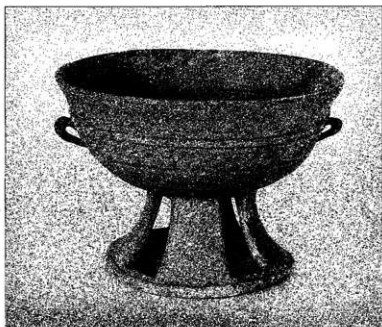


古 新 田

こ しん でん

— 浅羽町立浅羽東小学校新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 —



1991年3月

静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

例 言

1. 本書は、磐田郡浅羽町浅羽に所在する古新田遺跡の発掘調査概報である。
2. 調査は、1989年3月から1990年3月にかけて行った。
3. 調査は、主体者 浅羽町教育委員会教育長 岡本幸夫、調査担当者 柴田 稔・柴田 睦、事務局 社会教育課で行った。
4. 本書の執筆は、分担で行った。分担は、下記のようなものである。
I—事務局 II・IV・V・VI—柴田 稔 III—柴田 睦 VII—柴田 稔・柴田 睦
5. 本書では、遺構名に略号を用いた。その略号は下記のようなものである。
H—掘立柱建物跡 J—竪穴住居跡 D—土坑 K—溝状遺構 P—小穴
6. 本書の編集は、浅羽町教育委員会社会教育課で行った。

目 次

I はじめに	1
II 周辺の環境	3
III 弥生時代の遺構・遺物	4
IV 古墳時代の遺構・遺物	11
V 奈良時代の遺構・遺物	21
VI 中世の遺構・遺物	22
VII まとめ	23

I は し め に

1986年、浅羽町では、浅羽町立浅羽北小学校の児童急増対策が話し合われた。これは、予測を大きく越えた浅羽町の人口急増に伴って、北小学校の児童数が1990年には1,000人を越える と推計され、学校の超大型化・設備不足などが予測されたためである。話し合いでは、北小学校の分離新設という結論が出され、新設校の用地選定を開始した。

候補地は、教育・行政環境を考慮に入れて6ヶ所が選定され、埋蔵文化財の所在調査は、用地の決定以前に踏査の形で行われた。

いずれの用地にも埋蔵文化財の所在が予測されたが、新設校用地に決定した浅羽町浅羽字古新田は、踏査による限りでは破壊された古墳の所在が予測される程度であった。

1988年11月には、用地取得に関する土地所有者との協議は完了していなかったが、文化財の所在状況を少しでも早く確認したいためトレンチによる確認調査を開始した。

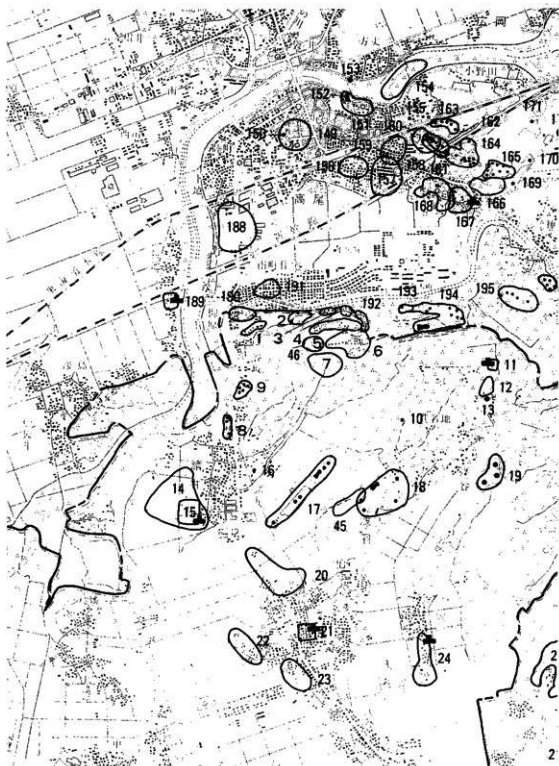
確認調査は、約1か月を要した。この調査では、2-1・2H、3-22H、4-8H、2-2Jなどの一部が検出された。しかし、3区を主とした地点では、建造物が所在していたため、確認調査ができなかった。確認調査の所見は、弥生時代の単位集落と6世紀前半頃の有力な集落であろうという内容であり、地方豪族の居館の可能性も指摘されてはいた。しかし、現在に至るような遺跡は予測できなかったのが実態である。

発掘調査は、1989年3月から開始した。確認調査から3か月で本調査が開始されたわけであるが、学校建築がいかに急がれたかを暗示するようである。

発掘調査が開始されると間もなく、1区の「ロ」字状配置の建物群などが検出され、予測を大きく上回る遺跡であることが判明した。

このために、調査費の補正も行われたが、1989年9月には、県教育委員会も含めて保存に関する協議を行った。

結果的には、現地保存は困難であるという結論に達し、正確な記録保存を行うこととなり、1990年3月に発掘調査は完了した。



第1図 位置図

(静岡県文化財地名表 1 : 50,000 使用)

Ⅱ 周 辺 の 環 境

古新田遺跡は、浅羽町浅羽字古新田に所在する。この付近は、通称では弥太井原と呼ばれ、明治9年に浅羽村に合併する以前は、弥太井村の地分であったことを窺わせている。弥太井村は、当地点から南西約1kmの沖積地上に集落の中心を持っており、弥太井村と古新田との間には、柴村・馬場村があり、両者を分断している。これは、古新田が、弥太井村の入会地としての性格を持っていたためであろう。

古新田遺跡は、名称から推察すると水田地帯を想像するが、実際には、小笠山塊の西南麓の高位の段丘面に立地している。

この段丘は、遺跡付近では、海拔15～20mの高さがあり、南西に向かって1%強の傾斜を持って低下し、水田面に埋没している。

段丘の侵食は相当進んでおり、遺跡周辺でも複雑な谷地形が観察できる。遺跡の北側には、開析谷がみられ、谷底に向かって45%前後の傾斜を持っている。また、西側には、先の谷地形から派生した支谷が進入し、南側に発達した開析谷の支谷と向かい合って台地の狭部を形成している。

したがって、遺跡の北・西側は、自然地形によって隣接地と分断されている。しかし、東・南側には台地の広がりが見られる。

遺跡の周辺には、貫名地A(17)・B(18)群などの古墳群が分布しているが、東方約1kmの山頂には、五ヶ山1～3号墳(19)が所在している。五ヶ山古墳は、古墳時代中期に築造された30m級の円墳の可能性が高く、当遺跡との関連で注目できる。また、貫名地遺跡は、弥生時代後期から古墳時代後期の集落跡の可能性があり、沖積地の自然堤防上には、高道遺跡(20)があり、古新

田遺跡とは事実上連続している。この高道遺跡も弥生時代後期から鎌倉時代に至る複合遺跡と考えられる。

袋井市域であるが、掛之上I遺跡(151)や大門I遺跡(157)からは、古墳時代後期の掘立柱建物跡が発見されており、当遺跡を検討する時には重要な資料となるであろう。

表一 周辺遺跡地名表(抽出)

番号	遺跡名	遺 跡 の 内 容
5	北山E	集落(弥生後期)、周溝墓(弥生後期)
7	北原	集落(弥生中期～古墳前期)
17	貫名地A	集落(弥生、古墳後期?)、前方後円墳
19	五ヶ山	古墳30m級円墳(古墳中期?)
20	高道	集落(弥生後期～鎌倉)
45	古新田	集落(弥生後期～古墳中期)
46	北山G	集落(弥生後期)
151	掛之上I	周溝墓(弥生)、掘立柱建物跡(古墳後期)
157	大門I	集落(弥生)、掘立柱建物跡(古墳後期)
194	高尾向山	古墳(前方後円墳を含む)

Ⅲ 弥生時代の遺構・遺物

1 遺 構

現在、出土遺物の整理途中であり、断定的なことは言えないが、弥生時代に属する遺物の大半は土器であり、そのほとんどは調査区の東半部から出土している。

検出された遺構には、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土坑、溝状遺構や小穴などがある。竪穴住居跡や土坑から出土した土器は、菊川式でも比較的新しい段階のものであり、当集落は弥生時代後期後半の短期間に生成消滅したと考えられる。

古墳時代の遺構に関しては、すでに一部を公表しており、未公表であった弥生時代の遺構については、やや詳しいデータの公表を目的としたが、未整理の部分もある。

1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡については他の時代のものとの区別が容易ではなく、ここでは、弥生時代の可能性の高いものだけについて述べる。

当時代に属するとした判断の基準は、

柱穴内の覆土の状態、出土遺物、形態の類似、他の時代の建物の方位や他遺跡例との比較検討による。

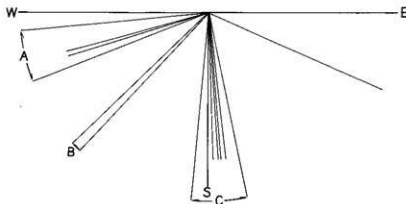
弥生時代の遺構の覆土は黄褐色が強く、プランの確認が難しい状態にあった。

表－2 弥生時代掘立柱建物跡

番号	遺構名	柱 間	方 位	規 模 (単位cm)	
				桁行×梁間	柱穴深さ
1	1- 6H	3×1	66°E	384×383	24
2	1- 8H	2×1	69°W	344×306	26
3	1- 9H	1×1	85°W	218×190	34
4	2-10H	2×1	75°W	413×357	30
5	2-15H	2×1	2°E	296×239	36
6	2-16H	2×1	4°E	295×267	40
7	2-17H	3×1	5°E	517×348	38
8	2-19H	3×1	7°E	306×279	42
9	2-20H	3×1	5°W	407×(305)	46
10	2-22H	2×1	12°E	313×334	28
11	3-12H	2×1	43°W	242×324	26
12	3-18H	3×1	73°W	359×482	42
13	3-25H	3×1	46°W	437×213	48

柱穴深さは平均値、()内は推定値 方位は南優先

表－3 弥生時代掘立柱建物跡の方位 (南優先)



出土遺物は少ないが、2-17Hの柱穴内底面から弥生土器片が出土している。

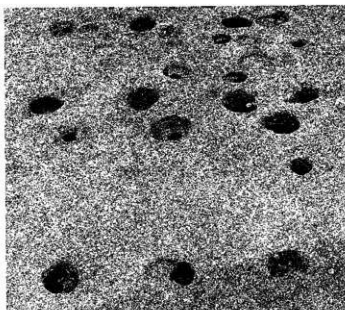
形態的な面では、東海地方以東においては、梁間が2間以上の例は少なく、梁間が1間で、桁行が2間以上のものは、梁間に対して桁行の柱間隔が狭いものが主体を占める傾向にありそうなので、こうした例を弥生時代に属するという前提で考えたい。

梁間が1間の掘立柱建物跡は調査区内全体に散在しているが、弥生土器が集中的に出土するのは東半部であり、今回は東半部の梁間が1間の例について主に述べる。

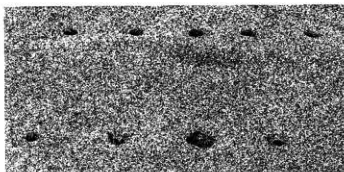
覆土が地山土と類似し、検出が極めて難しかったものに、2-15~17・19・20・22Hがある。いずれも、桁行の柱間隔が狭く、柱穴は深く、棟方向もほぼ一致する（C群）。

桁行の柱間隔が狭い例としては、他に1-6Hや3-12・18・25Hがある。3-12Hは西半部に位置し、3-18Hは独立棟持柱を有し、3-25Hは梁間が他に比して狭いが、一応当時代に含めて考えておきたい。

桁行が比較的広いものや4本柱のものには、1-8H、



2-15H（上）・2-16H（下）完掘状況



1-6H完掘状況



2-10H・2-4K完掘状況

1-9Hや2-10Hがある。これらの所属時期に関しては、今後の課題としておきたい。ちなみに、これらの掘立柱建物の柱穴規模は比較的小さく、しかも浅い。

その他の例として、2-11H、3-16H、3-19Hや3-32Hは他の時代に属する可能性が高い。

よって、当時代の掘立柱建物跡と考えられるものは、現状では、10棟を数える。これらはすべてが同時に存在したとは思えないが、竪穴住居跡の棟数とほぼ一致する点は、示唆的である。

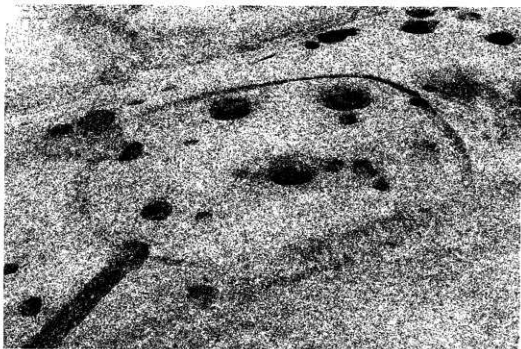
これらの建物の構造については、検討の余地を残すが、桁行が3間以下と小形で、柱間隔が狭く、柱穴は浅いものも存在するが、ほとんどは深く、規模も大きい。よって、上屋は高床構造となるのではないと思われる。また、その用途としては、倉庫を想定しているが、なお、詳細な検討の余地を残している。

2) 竪穴住居跡

弥生時代の竪穴住居跡の配置に関しては、生産基盤や防衛的な側面などから集落の立地が限定されやすく、地形の制約により、その配置構造の企画性は把みにくい。

当遺跡は比較的短期間の集落であり、また、集落を営む上でも十分な空間の余裕があったと考えられ、住居跡の配置構造を考える上でも貴重な遺跡と思われる。ただし、茶園の改植により深く擾乱を受けている地点が多く、残念である。

竪穴住居跡の配置を見ると、1-1Jを除いて、ほぼ弧状に並んでいることがわかる。これら



3-6J完掘状況

表一 4 弥生時代の竪穴住居跡

番号	遺構名	形 態	方 位	規模 (単位 cm)	備 考
				長径×短径×深さ	
1	1-1 J	楕 円 形	4° E	664×(540)×16	4本柱
2	1-6 J	隅丸方形	77° E	384×280×0	
3	2-2 J	楕 円 形	13° E	674×(550)×28	
4	2-4 J	隅丸方形	18° E	460×414×16	4本柱 中央部に地床炉?
5	2-5 J	隅丸方形	78° W	446×(350)×15	4本柱 中央部壁よりに地床炉
6	2-7 J	隅丸方形	88° W	590×430×8	4本柱 中央部壁よりに地床炉
7	2-8 J	隅丸方形	24° E	(500)×438×0	4本柱 中央部壁よりに地床炉
8	2-9 J	隅丸方形	76° W	(410)×358×14	4本柱 中央部に地床炉
9	2-11 J	楕 円 形	28° E	(455)×(390)×0	中央部に地床炉
10	3-5 J	隅丸方形	33° E	400×368×26	4本柱
11	3-6 J	楕 円 形	6° E	516×(422)×0	4本柱 中央部に地床炉、内1基に掘り込みあり、建て替え?

() 内は推定値、方位は南優先

は、重複状態から、およそ2時期以上に分離することは可能であるが、明確な区分は出来ない。

住居跡の構造については、ほとんどの住居跡は4本の主柱穴を有し、

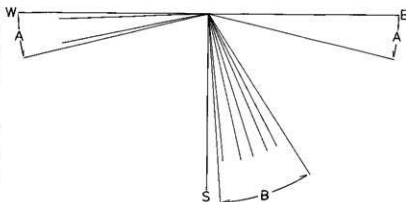
中央部付近には地床炉がみられ、壁に沿って周溝が巡り、壁外へと排水溝が伸びている。

平面形態としては、楕円形のものと同丸方形のものに区別出来る。楕円形のものには1-1 J、2-2・11 J、3-6 Jがあり、1-1 Jや2-2 Jは扁平な形態である。隅丸方形のものとしては、1-6 J、2-4・5・7・9 Jや3-5 Jがある。

隅丸方形の1-6 J、2-5・7・9 Jの主軸方位は、楕円形の住居跡の主軸方位とほぼ直交しており (A群)、また、柱穴もやや壁側に位置している。

この時期の竪穴住居跡の形態は方形化へと向かうようであり、また、楕円形と推定される2-11 Jをよけて、2-7 Jの排水溝が構築されており、その方向性は、当遺跡においても追認される。

表一 5 弥生時代竪穴住居跡の方位 (南優先)



よって、楕円形のは古相を、主軸方位が直交する隅丸方形のものは新相を示している。その他の隅丸方形のものについては、2-8 Jは2-5 Jに切られていることから古相に、2-4 Jと3-5 Jについては、とりあえず新相に含めておきたい。



2-7 J完掘状況

3) 土 坑

土坑の時代判定に関して
は、掘立柱建物の判断基準と同様である。

平面形態はほとんど楕円形であり、大形の例には2-23Dなどがあり、小形のものとしては表-6に示したものがある。

小形の土坑の中には、長方形に近い1-8 Dの様な例と靴底形のものがある。

1-8 Dの底面からは、比較的大きな土器破片が出土している。3-30Dも目立った遺物の出土はないが、平面形態は類似している。

靴底形の土坑内からは、数点の土器破片や拳大の礫が中層より出土している。底面は段を成すものが多く、また、2-9・17Dのように焼土が検出されるものがあり、概して、覆土内には炭化物が多い。これらは、とくに1-6グリッド付近に集中し、主軸方位も近似している。(A群。B・C群については、A群に対して直交するという解釈も成り立つ。

小形の土坑の用途に関しては、ゴミ捨て穴、墓坑や土器焼成坑といったものが考えられるが、遺物整理の進行に併せて、今後考えてゆきたい。

表-6 弥生時代の土坑(小形に限る)

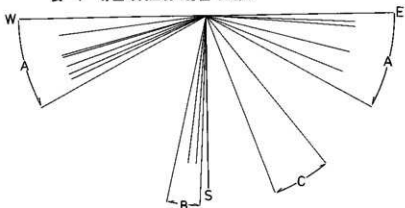
番号	遺構名	規模(単位cm)		方位
		長径×短径	深さ	
1	1-8D	270 × 74	28	3°W
2	2-2D	180 × 99	30	75°E
3	2-6D	234 × 79	7	62°W
4	2-7D	238 × 114	6	71°W
5	2-8D	120 × 70	14	8°W
6	2-9D	190 × 106	14	76°W
7	2-10D	128 × 106	14	13°W
8	2-11D	180 × 100	20	13°W
9	2-12D	132 × 110	18	84°W
10	2-13D	170 × 80	23	67°E
11	2-16D	184 × 72	7	66°W
12	2-17D	178 × 76	14	87°E
13	2-18D	126 × 60	18	75°W
14	2-19D	195 × 86	28	76°E
15	2-21D			20°E
16	2-28D	118 × 94	16	38°E
17	2-29D	180 × 76	4	85°E
18	2-30D	(132) × 78	18	68°W
19	2-32D	94 × 48	(12)	60°E
20	3-30D	186 × 50	24	5°W

()内は推定値、方位は南優先

4) そ の 他

その他の遺構としては、小穴や溝状遺溝がある。溝状遺構としては2—3・4 Kがあり、土器破片や拳大の礫が出土している。2—3 Kについては小形の土坑が重複したものかもしれない。

表-7 弥生時代土坑の方位 (南優先)



2 遺 物

出土遺物のほとんどは土器で、量自体もそれほど多くはない。しかも、図示に耐え得るような資料も少ないが、出土状態として、竪穴住居跡の排水溝や周溝内から出土する例があり、注目される。

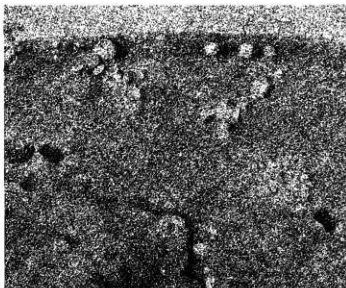
1) 弥生土器 (第2図)

1は2—6 D出土の壺の口縁部で、外反しながら開き、頂部で平坦面を作って折り返されている。口唇部下端は櫛歯状工具により刻まれ、外面は斜め刷毛調整が施され、赤彩されているようだ。内面にはL R縄文が施文され、上端にはS字状結節縄文が巡り、下端は横に撫でられている。

2と5は1—1 J出土の壺と脚付甕である。2は肩部に段を有し、2段の櫛刺突羽状文が施文されている。体部は下位に稜を有し、外面上半は



1—8 D完備状況



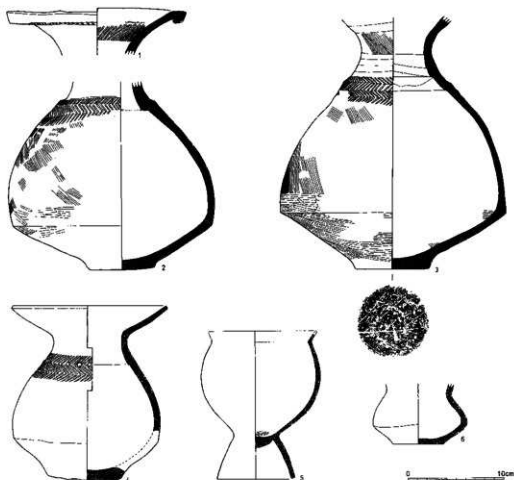
1—1 J遺物出土状況

斜め刷毛調整で、下半は横篋磨きがなされている。5は小形で、脚部はやや内弯気味に開く。体部は球形に近い。調整痕などは、摩滅により不明な点が多い。

3は2-7Jの排水溝出土の壺で、口縁部は外反気味に開くと思われる。肩部に緩やかな段を有し、2段の櫛刺突羽状文が施文されている。頸部外面は斜め刷毛調整後、横に撫でられている。内面には粘土紐の巻き上げ痕が残る。体部は下半に稜を有し、外面上半は斜めに刷毛調整され、下半は稜部より上が横に、下が斜めに篋磨きされている。内面の稜部および底部には、刷毛目痕が残る。底部には木葉痕がみられる。

4は2-2J出土の受け口状口縁の壺で、肩部に櫛刺突羽状文が施文され、その上に3個1対の円形浮文が4ヶ所に貼付されていたようだ。体部は下位に稜を有している。器外面は磨滅しているが、篋磨きされていたと思われる。

6は2-7J出土の小形の壺で、体部はソロバン玉状を呈している。調整痕は摩滅により不明。図示はしていないが、これらの他に高坏なども出土している。



第2図 弥生土器実測図

IV 古墳時代の遺構・遺物

1 遺 構

古墳時代の遺構には、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝状遺構、建物跡としての配列が確認できない小穴などがある。

次にこれらの概要を記す。

1) 掘立柱建物跡

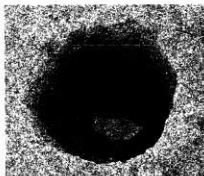
柱穴などから古墳時代の遺物が出土している例は、全体からみれば限られたもので、伴出遺物から個々の建物跡の時期を推察するには限界がある。このため、古墳時代であることが確定的な建物跡を基準として、建物跡の方位や組み合わせなどから類推したものが多い。しかし、この作業でも所属の時期が判明しない例も少なくない。後述するE類などはその例に属する。これらは、当遺跡を通観した中で結論を出した。

以上のような作業で、59棟を古墳時代の掘立柱建物跡と考えたが、この作業は現在も進めている段階であり、今後の検討で若干の変動は有り得る。

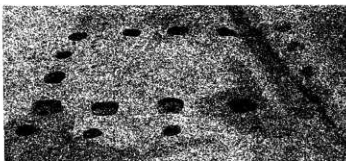
これらの建物跡は、柱穴の配列から幾つかの形態に別けることができるので、その分類に従って記述するが、精細な分類は本報告に譲ることとする。

庇付建物跡 1-2 H、2-5 H、3-2・5・14・24 H、4-4 Hなどは庇付きの建物跡であろう。1-2 Hや2-5 Hのように、底部分の柱穴が側柱穴よりも小さくて浅い例と、3-2・14 H、4-4 Hのようにいずれの柱穴も類似した例とがある。これは、建物構造の違いによるものと考えられる。

屋内棟持柱付建物跡 3-1・4・5・13・20・22・23・24・28 H、4-4 Hは、屋内に2本の棟持柱穴を伴っている。棟持柱穴は、側柱穴よりも深くて大きい傾向を示している



3-32 H 柱穴内遺物出土状況



2-5 H 完掘状況



3-1 H 完掘状況

が、4-4 H、3-20・28 Hなどは、大差のない規模である。

3-6・7・29 Hは、棟持柱穴が検出されるべき部分が攪乱のため確認できないが、この形態に属する可能性もある。

総柱式建物跡 1-1・3・5 H、2-1~4・11・12・22、3-16・17 H、4-8 Hなどは、

総柱式の建物跡である。これらはさらに細分できる。

1-3 H、2-1・2 Hは、一般にみられる例とは異なって、束柱穴が1本多い構造である。3-16 Hもこれに属する可能性がある。1-5 H、2-3・12 H、3-17 H、4-8 Hは、いわゆる「田」字の構造を示す建物跡である。

これらの内、2-2・3 Hは片側の棟持柱が、1-3 H、2-1・12 H、4-8 Hは両側の棟持柱が柱1本分外側にあるように復元できる。また、1-1 H、2-4 Hに関しても検討の余地がある。

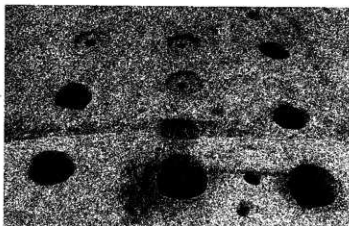
1-1 H、2-4 Hは、梁間2間、桁行3間であり、他

の総柱式建物跡に比較すると大形でもあるが、柱穴内には根石を置いたり、根巻石を置いており、丁寧かつ堅固さが目立つ。

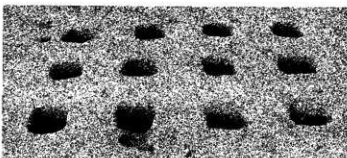
掘立柱建物跡 上記以外の建物跡を全て掘立柱建物跡と呼ぶと、数の上では最も多い。これらは、柱穴の大小によって2類に別けられる。

柱穴の大きい例としては、2-21 H・4-1・2・5~7・13 Hなどを挙げることができる。また、小さい例としては1-7 H、2-14 H、3-3・20 H、4-9・10 Hなどがある。

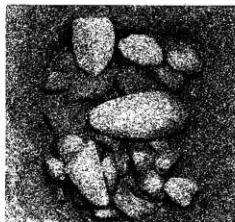
しかし、中間的例もあり厳密ではない。両者に別



2-1 H完備状況



2-4 H完備状況



2-4 H柱穴内根石

けた場合には、前者が梁間2～3間、桁行3～4間で柱間が広いのに対し、後者は、梁間3～4間、桁行4～5間の例が目立ち、柱間が狭い。この傾向は、底付建物跡・屋内棟持柱付建物跡にもみられる。

2) 掘立柱建物跡の方位

59棟の掘立柱建物跡は、調査区のほぼ全域に分布しているが、これらの中には、「コ」字状の配置を想定できる場所や、「ロ」字状配置が想定できる場所がある。そこで、これらを基準として建物跡の方位を検討してみた。

調査区の西端には、当遺跡で最大面積の4—4Hを中心に4—5・7・9・13Hによってほぼ南向きの「コ」字状の建物配置がみられる。この群は、南に対して約4°西向きから約3°東向きの方角を示している。この方位差約7°の幅の中に収まる例をA群とした。

A群に属する例は、前記以外に、調査区中央東よりに3棟、東よりに1棟が有り、合計9棟である。

調査区東よりの部分には、総柱式建物跡6棟、底付建物跡2棟によって「ロ」字状の配置がみられる。この8棟は南に対して約19～25°東向きの方角を示している。この方位差約6°の中に収まる建物跡をC1群とした。

C1群に属する例は、先の8棟以外に、調査区中央東よりに3—13・20・22・32Hの4棟が有る。

この4棟は、3—16・19Hとは事実上ほとんど同じ方位にみえる。方位の測定では、3—16Hが南に対して約15°東向きである。これは、C1群の最も南向きの建物跡よりもさらに4°南向きであるが、約15～19°の方位の幅の中に収まる例をC2群とした。

C2群に属する例は、他に4—1・8Hが有り、合計4棟である。

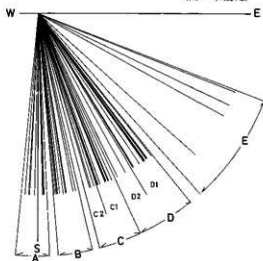
調査区中央西よりの部分には、3—1～5Hの5棟が「コ」字状配置を示している。この群は、南に対して約32～39°東向きの方角を示している。この方位差約7°の中に収まる例をD1群とした。

D1群に属する例は、先の5例の他に3—6～8・24・28・29Hが有り、合計11棟である。

3—10Hは、D1群でもっとも南を向いている3—1Hよりもさらに約3°南を向いているが、両者はほとんど同一方位といえる。

表一B 古墳時代掘立柱建物跡の方位

(南・東優先)



表一 9 古墳時代掘立柱建物跡の方位と群別 (方位は南・東優先)

番号	遺構名	方 位	群 別	番号	遺構名	方 位	群 別	番号	遺構名	方 位	群 別
1	1-1	19° E	C	21	2-21	11° E	B	41	3-21	2° E	A
2	1-2	22° E	C	22	2-22	13° E	B	42	3-22	20° E	C
3	1-3	24° E	C	23	2-23		E	43	3-24	31° E	D
4	1-4	64° E	E	24	3-1	32° E	D	44	3-26	61° E	E
5	1-5	5° W	A	25	3-2	36° E	D	45	3-27	48° E	E
6	1-7	12° E	B	26	3-3	36° E	D	46	3-28	36° E	D
7	2-1	23° E	C	27	3-4	39° E	D	47	3-29	32° E	D
8	2-2	19° E	C	28	3-5	37° E	D	48	3-31	4° E	E
9	2-3	25° E	C	29	3-6	39° E	D	49	3-32	22° E	C
10	2-4	22° E	C	30	3-7	37° E	D	50	4-1	17° E	C(C2)
11	2-5	22° E	C	31	3-8	34° E	D	51	4-2	6° E	B
12	2-6	5° E	B	32	3-10	29° E	D(D2)	52	4-4	1° W	A
13	2-7		E	33	3-11	26° E	D(D2)	53	4-5	3° E	A
14	2-8	6° E	B	34	3-13	23° E	C	54	4-6	8° E	B
15	2-9	6° E	B	35	3-14	2° E	A	55	4-7	3° W	A
16	2-11	5° E	B	36	3-15	9° E	B	56	4-8	18° E	C(C2)
17	2-12	9° E	B	37	3-16	15° E	C(C2)	57	4-9	3° W	A
18	2-13	69° W	E	38	3-17	2° E	A	58	4-10	69° W	E
19	2-14	6° E	B	39	3-19	17° E	C(C2)	59	4-13	4° W	A
20	2-18	7° E	B	40	3-20	19° E	C				

また、3-11Hは3-1Hよりも約6° 南向きであり、D1群との比較では相当異なった方向である。ここではこの2棟を便宜的にD2群とした。

A群とC群との間には、約13°の空白がある。この空白幅は、A・C・D群の幅よりも大きい。この幅の中に収まる例が12棟ある。これをB群とした。

B群には、企画性が主張できるような建物配置はみられないが、後に示すE群とは異なって、大形の柱穴をもつ建物跡が含まれている。

以上の方位の幅からはみだした建物跡が6例あるが、これをE群としてまとめた。

古墳時代と思われる建物跡をA～E群に別けてみたが、これがどの程度まで有効であるかは、今後さらに検討することとしたい。

3) 竪穴住居跡

古墳時代の竪穴住居跡は、拡張あるいは同一箇所での建替を1棟と数えて、16棟が検出され

た。しかし、2-3 J 東側や3-1 J 西側などは、攪乱が激しくて検出できなかったが、所在した可能性は指摘できる。

これらの竪穴住居跡は、1-6 Jを除いて掘立柱建物跡群の北側に分布し、両者の間には明瞭な占地上の差が認められる。

規模は、3-1 J、4-1 Jが一辺6~7mとやや大形であり、他は一辺5m前後である。

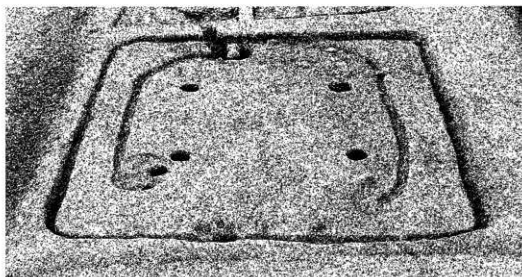
形態的には、1-2 Jが1-1 Kに関連していると考えると特異な例になるが、他は全て方形に近い隅丸方形である。

竪穴内の主柱は4本が基本的なようである。

2-2・6 J、3-3 J、4-1・3 Jは、排水溝を持っている。また、1-4・6 J、2-1・3 J、3-1 J、4-1・3 Jなどは貯蔵穴と思われる小穴を伴っている。

炉跡は全て地床炉であるが、床面に焼土が分布する部分が多く、一つの竪穴内に複数の炉跡が存在した可能性がある。

これらの竪穴住居跡は、極端な密集はみせないで、むしろ台地北縁に散在的に分布している。



4-1 J 完備状況



4-1 J 遺物出土状況



4-1 J 遺物出土状況

このため、4-1Jと4-2Jのように、同時に存在し得ないことを確認できる例は少ない。

また、出土遺物からは、現時点では堅穴の新古を確認することはできない。

堅穴は、原則として掘立柱建物跡群の北側に分布しており、状況的にも出土遺物からみて、両者の共存が考えられる。しかし、現時点では、客観的事実としての共存関係は明確にできない。

4) 土 坑

古墳時代に属する土坑は、調査区の全域からおびただしい数が検出されている。しかし、相対的には、調査区の西よりに集中する傾向をみせ、「コ」字状配置の建物群との関連が予測される。

土坑には、4-3Dや3-10Dのように単独で存在する例と、調査区西南部分のように密集する例とがある。

規模と形態は、3-2・10D、4-3・6Dのように、長径5～7mで楕円形をした例、3-1・9D、や4-1Dのように、径2m前後の小形で不整形な例がある。しかし、不整形な例や不明瞭な例も少なくない。

単独で人形の土坑には、主屋と思われる屋内棟持柱建物跡の側方から検出される例がある。3-2・10D、4-3・6Dなどであるが、これらが企画的な配置を示す建物跡群と関連しているのかを証明する手段はないが、位置関係が示唆的であることは指摘できる。

これらの土坑からは、高環・埴・甕などの土師器、白玉を主体とした滑石製模造品、須恵器、焼石、炭化物などが多量に出土する例が目立つ。

これらのうち、特徴的な土坑を数例挙げる。

4-3Dは3,000点を越える石製模造品が出土し、他の土坑に比較すると圧倒的量を占めている。4-6Dと3-10Dからは、同一個体の須恵器が分散して出土している。



3-10D遺物出土状況

5) そ の 他

竪穴住居跡に伴う排水溝以外に、古墳時代に属する可能性を持つ溝状遺構が若干検出された。

1-2~6 Kなどであるが、概して細くて浅いものであり、出土遺物も少ない。

また、建物跡として復元し得なかった小穴も少なくない。

2 遺 物

遺物の出土量は、遺跡の面積に比較すれば多い方ではないが、土坑・竪穴住居跡には遺物の集中がみられた。

出土した遺物には、土師器、須恵器、滑石製模造品、土製支脚、ガラス小玉、凝灰岩製管玉、鉄器、その他である。これらの内、大半は前三者であり、後者はいずれも数点程度である。

土師器と須恵器の割合は、正確な数値を出していないが、大半が土師器である。また、滑石製模造品は、約4,000点である。

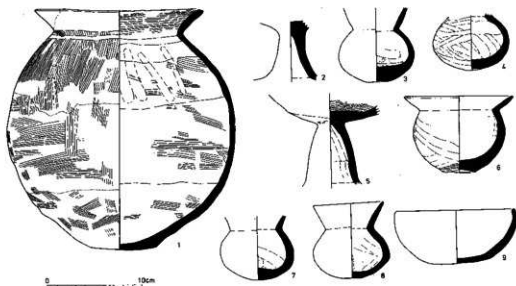
次にこれらの概要を記すが、資料の整理が進んでいないため、無作為に抽出した一部だけを報告する。

1) 土師器 (第3図)

出土量は少なくないが、保存状況は極めて悪く、復元し得ないものが多い。

1は、4-1 Jの貯蔵穴から出土した2個体の内の1点である。口縁部は、「く」字状に外反し、端部は丸い。体部は、長頸気味で、底部は平底気味の丸底である。口縁外面は、斜め刷毛調整後に横撫でが施されている。体部外面は斜め刷毛調整、口縁内面は横刷毛調整、体部内面は、横および斜め刷毛調整が施されているが、肩部では、この後に指撫で調整が行われている。

2は2-2 J、5は4-2 D出土の高坏である。2の脚部は外反しながら端部に向かい、端部



第3図 土師器実測図

付近で朝顔状に外反する。5の脚部は、内弯気味に外方にのび、端部近くで大きく外反する。5は、坏部下半に甘い稜を持っている。また、内面には、横および斜め磨きがみられる。

3は2-2J、4・7・8は4-2Dから出土した小型埴である。3・4は窪み底、7・8は丸底に作られ、体部は球形ないしは扁球形である。保存状況が悪いために体部の調整痕は不明確だが、口縁は内外面共に横撫で、体部外面は篋撫でないしは磨きと思われる。体部内面は指による撫でが顕著である。

6は4-2Dから出土した小型鉢である。口縁部は、「く」字状に大きく外反し、体部は丸い。底部は窪み底である。口縁部の調整は、内外共に横撫で、体部は篋撫で、体部から底部に移行する部分には斜め刷毛調整痕がみられる。

9は、2-1Pから出土した坏である。口縁部は、内弯し端部は丸い。体部は丸味をもって底部に至り、底部はやや平坦である。各部の調整痕は保存状況が悪いために不明である。

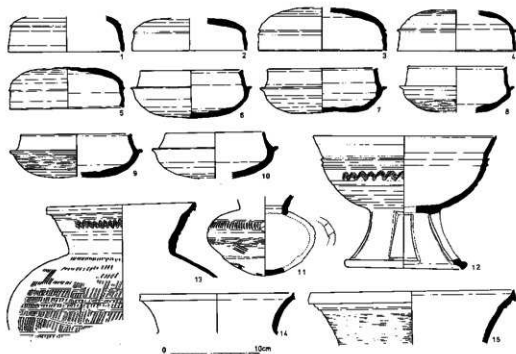
以上のような土師器が、当遺跡を代表するものであるかは、整理の結果を待ちたい。また、図示はしていないが、脚付甕、壺、手捏土器、甗、甗なども出土している。

2) 須恵器 (第4図)

土師器に比較すれば出土量は極めて少ない。

1は土坑群、2・3は4-1D、4は4-3J、5は1-4Jから出土した蓋である。

1は、低く甘い稜と丸くおさめられた端部が特徴的である。2も甘い稜がみられるが端部にはわずかな段がみられる。3は稜の下方を窪めて鋭い感じを与えており、端部にはわずかに内傾す



第4図 須恵器実測図

る段がみられる。4・5には明瞭な稜があり、端部には内傾する段がみられる。口縁部は、1・2・4がやや外方にのび、3・5は直下にのびる。篋削りは、全て回転篋削りで、細かく数回に別けて行われている。削りの方向は全て右方向である。

6・7は4-2 D、8は1-1 J、9は土坑群、10は小穴から出土した坏身である。

6~9の口縁部は、やや内上方にのび、端部には内傾する段がみられる。受部は、やや上外方ないしは平行にのびている。体部は全体に丸い感じを与えるが、6~8は受部直下にわずかな屈曲がみられる。10の口縁部はやや内上方にのび、端部は丸い。受部は上外方にのびる。体部の篋削りは全体に入念であり、8・9にはカキ目がみられる。篋削りの方向は、10が左方向、6・7・9が右方向、8は不明である。

11は土坑群から出土した甕である。

口縁部を欠損している。体部の最大径は、上半にあり、孔の位置も上半にある。文様は櫛目文である。調整は、体部の文様から上は横撫で調整、文様から下は横撫で、カキ目、撫で調整であり、体部下半には平行叩きの痕がみられる。

12は土坑群から出土した無蓋高坏である。

坏部は深く、口縁部はやや外反し、端部は丸味をもっている。文様は波状文で、上下は凸線で仕切られている。胸部は短く、端部の段は甘い。窓は長方形で四方にある。窓の側面は丁寧な篋削りで面取りが行われている。把手は接合できるものがなかったが、取り付けられていた可能性はある。

13は4-1 J、14・15は1-1 D出土の甕である。

13の口縁部は緩やかに外反し、端部近くに凸線が1状巡っている。凸線の下には波状文がみられる。体部外面は平行叩の後に肩部は横撫で、それ以下は一部刷り消し調整である。体部内面の叩き目は丁寧に刷り消されている。14は口縁端部直下の凸線が消失している。15の口縁外面はカキ目調整である。

須恵器は細片化したものが多く、復元も進んでいないが、上記した資料が当遺跡の時期を代表し得ると考えている。また、図示した以外に大形甕、大甕、器台、甕などがある。



石製模造品 剣・勾玉（各地点出土）

3) 石製模造品

調査区の西半分を中心として、4,000点前後の石製模造品が出土した。とくに、4-3 Dからは3,000点前後が集中的に出土し、多量の使用を予測させる。

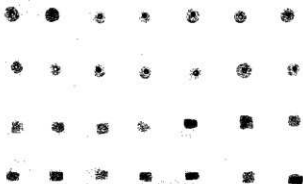
模造品には、白玉、勾玉、剣、管玉がある。これらの内、剣は1点、管玉は数点、勾玉は十数点で、残りは全て白玉である。

白玉は、臼状と筒状の2形態がある。しかし、臼状のものにも形骸化がみられる。また、勾玉は、扁平な石材を平面形だけ勾玉の形にしたもので、立体的なものや子持勾玉などはみられない。剣は、小形であるが鑄の表現はある。管玉については、模造品なのか実用品なのかの区別がつかない。

これらの模造品は、4-3 Dが示すように土坑内から出土することが多いが、柱穴から出土した例も少なくない。とくに、2-4 Hや4-4 Hなどは、立柱に関する祭祀と関連して考えることができるとされる。

4) その他の遺物

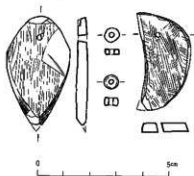
ガラス小玉、凝灰岩製管玉、土製支脚などが土坑内から出土しているがいずれも少量である。また、4-5 Hの柱穴内からは刀子1点が出土している。



石製模造品 白玉 (4-3 D出土)



石製模造品 白玉 (4-3 D出土)



第5図 石製模造品実測図

V 奈良時代の遺構・遺物

1 遺 構

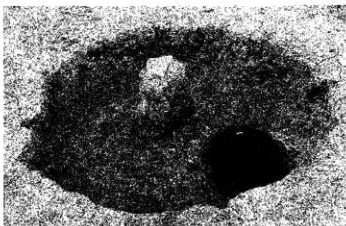
奈良時代の遺構には、掘立柱建物跡1棟と土坑1基がある。

1) 掘立柱建物跡

3-13Hと重複している3-23Hは、北東隅の柱穴検出面から奈良時代の須恵器坏身片が発見された。厳密には、柱穴に伴っているとはいえないが、遺跡の性格を捉える上では古墳時代の遺構から除外して、奈良時代に属すると考えた。

梁間3間、桁行4間で南側に庇がある。建物の方位は、南に対して約8°東向きであり、古墳時代の建物跡に対比すればB群に属する。

調査区西端から検出した4-12Hは、北側の柱穴から奈良時代の須恵器が出土した。この須恵器は、小破片ではあるが、柱穴に伴うと考えられるため、遺構全体を奈良時代以降の時期と考えた。一部が調査区外に伸びているために、規模は不明である。



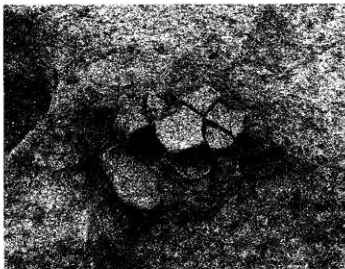
3-23H遺物出土状況

2) 土 坑

確実な遺構として検出されたのは、2-13Dが1基である。攪乱により全容を知り得ないが、床面近くから土師器の脚付盤が出土した。

2 遺 物

出土遺物は極少量で、脚付盤、須恵器片の他には、3-10D内に混入していた土師器壺と須恵器片が発見された程度である。



2-13D遺物出土状況

VI 中世の遺構・遺物

1 遺 構

中世の遺構には土坑がある。これらの多くは土坑墓であろう。

1) 土 坑

長径1 m前後、短径0.8 m前後で、丸味のある隅丸方形の土坑が、調査区全域に散在的に検出された。この土坑の壁面は、垂直に立ち上っており、覆土は黒色土と黄褐色粘土が混合している。

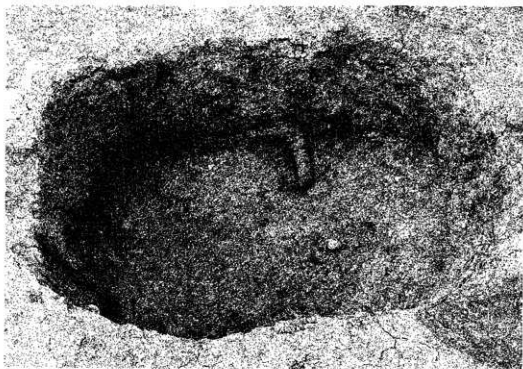
1-10D、4-11・13・14Dからは古銭が出土し、4-12Dからは古銭と鉄製鎌が出土しているが、これらは副葬品と考えられる。

2-27D、4-11Dなどには、拳大から人頭大の礫が十数個含まれていた。また、2-20Dの床面には、箱形の棺の痕跡と思われる有機物が残存していた。

これらの他、2-33D、3-16・25Dなども中世に属する土坑であろう。

2 遺 物

中世の遺物としては、古銭、鉄製鎌がある。古銭は、保存状況は悪いが、開元通宝、永楽通宝、宣徳通宝などがある。



4-12D完掘状況

VII ま と め

古新田遺跡を通観したとき、二つの大きな画期をみることができる。その最初は、弥生時代の集落であり、次が古墳時代の豪族の居館跡とも呼ぶべき拠点集落である。これらについて若干の問題点を指摘したい。

弥生時代の古新田遺跡

弥生時代の遺構には、竪穴住居跡、掘立柱建物跡や土坑などがあり、これから出土した遺物のほとんどは土器である。

出土した土器をみると、中東遠地方に分布する菊川式でも新しい段階のものに限られている。このことは、Ⅱで記したように集落が2期に渡って営まれていたとしても、その存続期間はそれほど長いものではなかったといえる。

また、掘立柱建物跡は、東半分の遺構に限定して論じたが、西半分の3—9H、4—3・11・14Hなども追加される可能性がある。

遠江地方でも近年では、弥生時代の掘立柱建物跡の発見は珍しくないが、竪穴住居跡1棟に対して掘立柱建物跡が1棟というのは、比率の上では、従来の例に比較して高いように思える。

これらの点は今後の検討課題となるであろうが、古墳時代の遺構群出現の前史として捉えてみたい。

古墳時代の古新田遺跡

古墳時代の遺構・遺物はⅢで記したように多量である。

遺構の時期決定は、相当慎重に行ったつもりであるが、さらに検討を必要とするかも知れない。これは、「コ」字状の建物配置や「ロ」字状の建物配置という、整然とした企画性に基づいた建物群が予測されるためである。

建物群の年代を決定する意味で、出土遺物の検討を行ってみる。

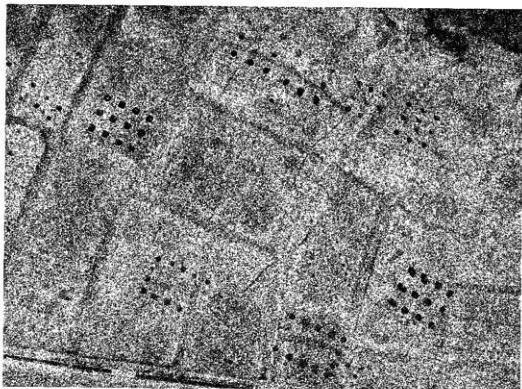
第Ⅲ図に示した土師器は、磐田市見性寺貝塚、袋井市坂尻遺跡を始めとした幾つかの遺跡で類例を知ることができる。これらは、後藤康司、松井—明氏らの研究(註1)によってある程度年代観を知ることができるようになった。この見解に従えば、5世紀の後半代の土師器とみることができよう。

第4図に示した須恵器は、遠江地方では古手に属するものであり、出土例も多くはない。

これらの資料は、田辺昭三氏の編年(註2)に従えば、TK208～23型式に類似しているといえる。また、それらの中でも第4図—1などは、より古い要素を含んでいるとみることができる。

以上のように土師器・須恵器は、基本的には5世紀後半代を特徴付ける遺物である。

当遺跡の場合、4世紀から5世紀前半といえる遺物は完全に欠落している。また、6世紀といえる遺物もみられない。さらに、7世紀の遺物も遠考研編年(註3)の第Ⅳ期後半と考えられる



「コ」字状配置の建物群（C群）



「コ」字状配置の建物群（D群）

資料が数点みられるだけである。

このことが、当遺跡における5世紀後半の遺構群をより鮮明に認識させている。

ただ、8世紀の掘立柱建物跡とした遺構も2例ながら存在しているわけで、この2例から導き出される遺構群の存在は今後も十分に検討しなくてはならない。

以上のような好条件で5世紀後半の遺構群を抽出できた。

今後に残された課題は、「コ」字状の配置や「ロ」字状の配置の建物群の変遷や同時性といった、当遺跡で最も重要なことがらについてであるが、これらについてはさらに検討を加えたい。

文末になったが、遺跡の調査から資料の整理に関しては、多くの先学諸氏諸機関の御指導・御援助を得た。御芳名を記して感謝の意を表したい。

石野博信 伊藤玄三 小笠原好彦 宮本長二郎 安部義平 市原壽文 田辺昭三 鈴木靖民
向坂鋼二 辰巳和弘 橋本博文 鈴木敏弘 小林重義 大谷 猛 実川順一 車崎正彦
小川貴司 南 秀雄 酒寄雅志 岡村勝行 横山 洋 杉本 良 高崎直哉
静岡県教育委員会文化課 静岡県埋蔵文化財調査研究所 静岡県教育委員会県史編さん室
静岡県考古学会 法政大学考古学研究室 (順不同・敬称略)

註

- 註1 後藤康司、松井一明他 『板尻遺跡』一序文・古墳時代編一 建設省中部地方建設局・
静岡県教育委員会・袋井市教育委員会 1985
註2 田辺昭三 『須恵器大成』 角川書店 1981
註3 山村 宏他 『大沢・川尻窯跡調査報告書』 遠江考古学研究会 1966

参 考 文 献

- 宮本長二郎 「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』一本書一 第29
回研究会実行委員会（埋蔵文化財研究会）1991
「5 住居」『日本考古学』4 集落と祭祀 岩波書店 1986

1991 年 3 月 30 日発行

古 新 田

一浅羽町立浅羽東小学校新設工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査概報一

編集 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会
発行

印刷 磐田市二之宮251
株式会社 山田印刷所

